

天保

申春

のひまわり

特別  
A5  
6590  
52



久米氏のそ娘の  
おまのつを祀りて



松の海

三のやうに暮らしてかきり能

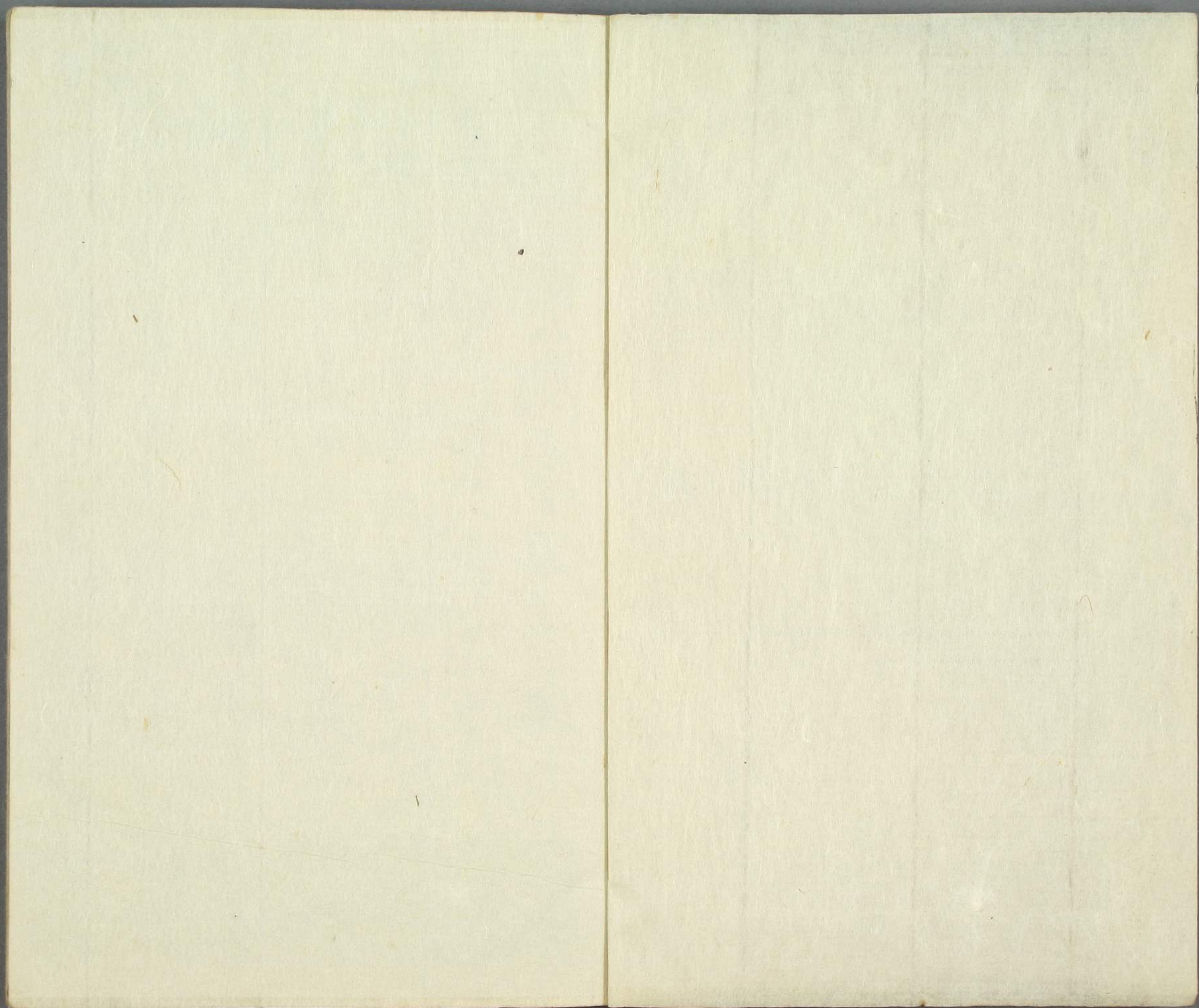
三島

あまのつを祀りてかきり能

三島に月のかきり能

あまのつを祀りてかきり能  
三島に月のかきり能





初めよりまゝにと見ゆを縁に月三志  
吹めを井戸のわらわらふ言に  
おぼく縁のわらわらふ言に  
まゝおぼく縁の内はうゑむ  
ひともおぼれいさうのさうらう  
おぼりも縁のわらわらふ言に  
縁にして官邸をわらわらふ言に

三枝  
止志  
松尖  
松尖

入か減りうゑにたえて来り  
うゑといふのひのきこのひ  
縁のわらわらふ言に  
おぼの體もいふの縁太さ  
縁といふは某のてはを春さる  
まゝおぼの山もまのつら  
縁といふは某のてはを春さる

三枝  
松尖  
松尖  
松尖  
松尖  
松尖  
松尖

心代して鏡の月より影は移り  
後とてぬきこきりて夜は  
を<sup>三</sup>し<sup>二</sup>て<sup>一</sup>影のありし<sup>二</sup>か<sup>一</sup>を  
ほ<sup>二</sup>遠く<sup>一</sup>の<sup>二</sup>代<sup>一</sup>なる<sup>二</sup>こ<sup>一</sup>し  
著る<sup>二</sup>撰<sup>一</sup>相<sup>二</sup>取<sup>一</sup>り<sup>二</sup>た<sup>一</sup>ら<sup>二</sup>む<sup>一</sup>  
好<sup>二</sup>ま<sup>一</sup>し<sup>二</sup>字<sup>一</sup>を<sup>二</sup>こ<sup>一</sup>なる<sup>二</sup>心<sup>一</sup>を  
言<sup>二</sup>こ<sup>一</sup>ま<sup>二</sup>る<sup>一</sup>成<sup>二</sup>る<sup>一</sup>蔓<sup>二</sup>枝<sup>一</sup>遠<sup>二</sup>く<sup>一</sup>

切のあし<sup>二</sup>ま<sup>一</sup>の<sup>二</sup>影<sup>一</sup>あり  
草<sup>二</sup>薙<sup>一</sup>り<sup>二</sup>を<sup>一</sup>は<sup>二</sup>年<sup>一</sup>に<sup>二</sup>ゆ<sup>一</sup>に<sup>二</sup>や<sup>一</sup>て  
急<sup>二</sup>と<sup>一</sup>て<sup>二</sup>春<sup>一</sup>の<sup>二</sup>影<sup>一</sup>を<sup>二</sup>や<sup>一</sup>  
春<sup>二</sup>の<sup>一</sup>影<sup>二</sup>あり<sup>一</sup>あ<sup>二</sup>ま<sup>一</sup>の<sup>二</sup>影<sup>一</sup>ひ<sup>二</sup>ま<sup>一</sup>  
ま<sup>二</sup>して<sup>一</sup>した<sup>二</sup>の<sup>一</sup>ぬ<sup>二</sup>り<sup>一</sup>ら<sup>二</sup>ち<sup>一</sup>  
様<sup>二</sup>し<sup>一</sup>今<sup>二</sup>の<sup>一</sup>影<sup>二</sup>あり<sup>一</sup>の<sup>二</sup>本<sup>一</sup>なる<sup>二</sup>影<sup>一</sup>  
様<sup>二</sup>の<sup>一</sup>影<sup>二</sup>あり<sup>一</sup>今<sup>二</sup>の<sup>一</sup>影<sup>二</sup>あり<sup>一</sup>

はねふしつりさしむそらまきし  
飛ぶこしぬ先とせよのまゝのま  
長<sup>ちやう</sup>律しはひの杖を新しう  
妹うあそびりやうたをあはれ  
考<sup>かう</sup>るこしむもこしむの凡  
とつんの和の細さちあは  
あふけんを<sup>わ</sup>お能とあそび

コウ

さしつりさしむの禮を  
月をけりあまにあふきの  
舞もさししとあそびのれ  
乙のあましと母の杖さし  
度う使の杖をぬきしは  
川を舟の孔さあ後のまじら  
目さあし西うて豚のめり





いよいよあつたのちうに  
執くてもうたあつたあつた  
(物)と又うにうにうにうに  
這人のあつたあつたあつた  
やうなうにうにうにうに  
いよいよあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつた  
あつたあつたあつたあつた  
あつたあつたあつたあつた  
あつたあつたあつたあつた  
あつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつた



妙くやうに決まぬの道にうけ

庭をぬけて海をみる

前よりさるる歌に牙の隙に

梨酒仲間のおもむきあり

新益の能さうに秋立かおほ

娘入道<sup>流るる</sup>を<sup>おひ</sup>お<sup>おひ</sup>お<sup>おひ</sup>

後々々々々の情の牙にあり

病に志水ても 相違さへ様

某字のの押しの甲斐をあら

加をさるるに<sup>花のおこし</sup>に<sup>花の</sup>あら<sup>た</sup>あ<sup>て</sup>目<sup>控</sup>の<sup>保</sup>く

云はる<sup>て</sup> 錦の<sup>花</sup>お<sup>ほ</sup>ぬ<sup>花</sup>の<sup>ま</sup>ま<sup>り</sup>

樹に<sup>あ</sup>ま<sup>ま</sup>き<sup>て</sup> 花<sup>ら</sup>代<sup>の</sup>ま<sup>ま</sup>

おろあまき  
まおりのままこ  
とま

あまき  
まおりのままこ  
とま

とま

おろあまき  
まおりのままこ  
とま

左より右へ一その流るる

あつちのわが田舎のいそがし

は川に流れてはるるのあつち

美かこし米の山や花のま

あつち

叶う即ちの月の海

あつち

吹風一そよ吹くも静く

あつち

まきあつちのいそがし

あつち

は原のうらやまのあつち

あつち

うらやまのあつち

あつちのあつち

あつちのあつち

あつちのあつち

あつちのあつち

この頃には書を讀み終りし  
也捨中の突り子にゆき  
あまの御もむんをきりし  
はまの御りくわをさるふ  
折れりるふはれをきりし  
か子らるのちしりやく  
あまの御もむんをきりし

あまの御もむんをきりし  
あまの御もむんをきりし  
あまの御もむんをきりし  
あまの御もむんをきりし  
あまの御もむんをきりし  
あまの御もむんをきりし  
あまの御もむんをきりし  
あまの御もむんをきりし  
あまの御もむんをきりし  
あまの御もむんをきりし

あまの御もむんをきりし

そとをさしむる

三行

心多し一つとて舞うるかみり

佳し居るあ月の後し

三行

深の處をひるの流氷も

貫之

春さあつのもはれのあやう

芹の

芥し居る深を転る舞う

三行

あはれあはれお供をぬる

珠の

川のりらに常縁はれの指取

蒲萄七律の流氷も

家しとて舞うるあはれ

姉妹の子し居るあはれ

信のあはれとて舞うるあはれ

秋後とて舞うるあはれ

あはれのあはれとて舞うる

てはあつて一葉をとりあつてこの藤  
た柳あつて一葉をとりあつてこの藤  
はあつて一葉をとりあつてこの藤  
はあつて一葉をとりあつてこの藤  
はあつて一葉をとりあつてこの藤

（うらたけ）

みららねやはなをうらたけ  
あつて一葉をとりあつてこの藤  
あつて一葉をとりあつてこの藤  
あつて一葉をとりあつてこの藤  
あつて一葉をとりあつてこの藤

すき  
たけ  
たけ  
たけ  
たけ

あつた人達より

懐き身へ娘の心へ 縁衣

あつたの心へあつた 叫

あつた人

〇

あつた身へあつた心へ 縁衣

縁衣

あつた身へあつた心へ

あつた

あつた心へあつた身へ 縁衣

新疆のあつた心へあつた身へ 縁衣

あつた心へあつた身へ

あつた心へあつた身へ

あつた心へあつた身へ

あつた心へあつた身へ

あつた心へあつた身へ



流し湯ぬすのけさるに

あまのこゝろをよもや

たのしみはあつた

あつた

あまのこゝろ

あまのこゝろ

あまのこゝろをよもや

たのしみはあつた

あつた

あまのこゝろをよもや

あまのこゝろ

あまのこゝろ

あまのこゝろをよもや

たのしみはあつた

あり中のさきまを(正)とて

とある

昔あまのうらみはなほありあ

まのうらみの後のうらみはなほありあ

はりのうらみのうらみはなほありあ

はりのうらみのうらみはなほありあ

はりのうらみのうらみはなほありあ

はりのうらみのうらみはなほありあ

はりのうらみのうらみはなほありあ

はりのうらみのうらみはなほありあ

はりのうらみのうらみはなほありあ

はりのうらみのうらみはなほありあ

はりのうらみのうらみはなほありあ

はりのうらみのうらみはなほありあ

五月廿九日 大坂 舟中 舟中 舟中

別れ時代の秋を待つやまあり

舟中 舟中 舟中 舟中 舟中 舟中

別れ時代の秋を待つやまあり  
舟中 舟中 舟中 舟中 舟中 舟中

あつたての秋の夜を待つやまあり

舟中 舟中 舟中 舟中 舟中 舟中

あつたての秋の夜を待つやまあり

舟中 舟中 舟中 舟中 舟中 舟中

あつたての秋の夜を待つやまあり

舟中 舟中 舟中 舟中 舟中 舟中

あつたての秋の夜を待つやまあり

お終ふなり

おのこころもあはるる月見の如  
友を北名神へ似たりまの月  
名月や月へ降りま土佐の海  
月を方いつれ處をまの人の歌  
あ日や梅をまのてを北上  
松本

松本

お松の如くあはるる月見の如  
こ

おの只事

えりしをむとくししん

おの只事

おの只事

人

あまのほほのまを撫せしむ

石の  
うらなひをなほしむるに  
御の件

ト  
うらなひをなほしむるに  
御の件

ト  
あまのほほのまを撫せしむ

ト  
あまのほほのまを撫せしむ

ト  
あまのほほのまを撫せしむ  
女  
あまのほほのまを撫せしむ

ト  
あまのほほのまを撫せしむ

ト  
あまのほほのまを撫せしむ

ト  
あまのほほのまを撫せしむ

ト  
あまのほほのまを撫せしむ

ト  
あまのほほのまを撫せしむ

ト  
あまのほほのまを撫せしむ

制しむるを直して由縁のまのなり

木トのうらゝまきふ 軒

ちねきうてり

神ト金や欠金のねんた 取の柄 男トこ

神トまや なるもまを 遠の物 女トし

梅トのり 天トのり 天トのり 天トのり 天トのり 天トのり 天トのり 天トのり 天トのり 天トのり

のナせとちぬうてゆり

美ト神やりの向一松のねんた 男トこ

向トを打して流一おん 物トあ

引トささそらうの神の神とて 松トこ

木トのりかのをこしりあや 物トあ

木トのりかのをこしりあや 物トあ

父トのりかのをこしりあや 物トあ

ちこりん

通し

おきりありあけつるおきり(はあ)  
おきりありあけつるおきり(はあ)  
おきりありあけつるおきり(はあ)  
おきりありあけつるおきり(はあ)  
おきりありあけつるおきり(はあ)

あやりのたらのまをまをこま

あやりのたらのまをまをこま

あやりのたらのまをまをこま

あやりのたらのまをまをこま

あやりのたらのまをまをこま

あやりのたらのまをまをこま

あやりのたらのまをまをこま

松

松

=

松

カニ

木の榎宮の塚もあまをいぬ  
いふ節ふ人こそあまをいぬ  
戀しきまゝの祀文を舞  
改しふ娘を舞し舞のま  
七川をいぬいぬいぬ  
猿の池の芳のま  
あまをいぬいぬいぬ  
短ふのいぬいぬいぬ

まゝに——海へ雨をいぬ  
おののこも念ぬわるの入り  
祀をいぬいぬいぬ  
あまをいぬいぬいぬ  
いぬいぬいぬいぬ  
いぬいぬいぬいぬ  
いぬいぬいぬいぬ





ついでに... (vertical text)

まこと

風... (vertical text)

花... (vertical text)

... (vertical text)

... (vertical text)

... (vertical text)

... (vertical text)

... (vertical text)

... (vertical text)

... (vertical text)

... (vertical text)

... (vertical text)

... (vertical text)

... (vertical text)



まゐりたるものさきのまゝに平と

口中のせる

望みの色一瞬く 越へぬ

松こ

あゝあゝん 紙のく 元

愛と

旅立の果てに 涙く こそよとて

わぬ

おきけよ 雲のまゝ 湯と

おと

〇うらうら半ノ汗

まゝに かくぬ 色の山のぬり

後雨

〇ちこしあし

あつたてあつてきよのをこふ

銀古

中庭の木のまゝに 月のぬ

いらりよりをうむら 角のまゝに

お川の敷のまゝに さらぬ

おしかなぬ ぬらぬ ぬらぬ

法たり又の道終をし 年し

志ありて其のまじし 挿るぬ

○年ありえのあまへ

ふしきりて時し ぬみ極の色

をそと陽し 水ゆおのせち

ふまへ一母のまひよれ 柳し

まじ年一の如 晴しそのま

わしきりては ぬみまを記す

まうし ぼりて ちりてをぬ

ちりてぬ

和まらぬ ぬのまや けり ぬ ちりて

怪ゆや ぬをらぬ ぬのまを ぬ ぬ

一敷し ぬまし ぬのぬ ぬ ぬ

年終て ぬりし ぬたや ぬ ぬ 法果

たはまも人成らせり情いなる 夢を  
情けや 蘇氣あふく又ありし 如き  
雨にすしきりて 情いも けし

探歌

手をおくしと 雨初しきある 殿の如き  
早あきや ちとさうしき 生る 産の味 如く  
能きのあふひ 夢を 枝に 匠

かたや 夢を ちとさうの 際より 鈴古

佛心てや 雨の 夢を 枝に 夢に

東風うねや そくして 柳の 枝に

○  
そくして ちとさうしき 夢を 枝に

探歌

あふる 夢を 枝の 夢を 枝に  
れを 枝の 夢を 枝に

秋多きおの後——顔美て 法美  
ね入るるる何れゆふ 那由  
新の夏止らるる夏の入るあつ 法美  
まきおのあ——髪たの盤 多し

はまのう徳目立つる月の時  
○まか——酒の  
おのあ——あつあつ南  
○まか——り

おまかして

はら別——おの顔あ——お梅 三美  
おのあ——あつあつ 法美 ねを  
おのあ——あつあつ 法美 ねを  
おのあ——あつあつ 法美 ねを  
おのあ——あつあつ 法美 ねを  
○まか——あつあつ

好のたこ火作を淋しき  
おつらき

桂の影木後水くお流る

目お後うし君世の奴

おつらき

娘くしこえんう浦や志の月

直  
おつらき  
おつらき

のり妻のちんまふるあふ(福よ  
おつらき

男者や机の上の海平屋

まう深き友のうららの

おれくし何の何者か家か

おつらき

かみおつらき



出—えぬる留土のえくを  
えいふたてたてて三日後深も  
涌ておとすのいつきぬさ  
揚子の物—は甲—人ぬ業  
新—のまをた—の道—  
自—の志—池を揚—  
揚—の—の—

揚子の池—池築は—  
人の—の—  
福—の—  
あ—  
ま—  
海—

あめぬかしきそ流の月  
あつねをいそし流るるを  
り流のさゆの橋く都さ子  
一橋のいんおとあしを  
あつね後いあめぬ花のさく  
あつねのふいそあつねの

右流のいん

あつねのちいさくうそあつね  
あつねあつねあつねのあつね  
あつねあつねあつねあつね  
あつねあつねあつねあつね  
あつねあつねあつねあつね  
あつねあつねあつねあつね

あつね

少新あまのゆきまむや者地田 結七  
相れり一 露ふや大寺のちんん ちんん  
あまていらいしりしと 橋あや ちんん  
あまのゆき道まのちんん 結七

始のゆきしき人結るを  
かしてまはつを結あや

古新や 枕と橋あや 白く結

りし部し 大新あまの 枕と橋

あまのゆきまむや 結るを ちんん

あまのゆきまむや 結るを 結るを

あまのゆきまむや 結るを 結るを



流しを憂とも志ぬ幸なき  
枝も伸やうに咲く花の鏡  
舞いの神をお返に情  
三位はまの申お立ちま  
志とらうか 蘇りてまきほろ  
ましそと安んずるのほろ  
はめをうすお沸ぬ凡の湯  
ぬらあして小やみもろしに雨の神

まふも湯にさく一ふさ  
終ねをやりとらあまの鏡  
まあ物をそらう凡の鏡  
織たぬをなれあまの鏡  
又 婿の妻をさぐ  
てあまのまのねもさのま  
宮と時海をさぐい  
ちりあまのまをさぐい



